

無産政党地方議会議員の支持基盤形成

——社会民衆党京都市会議員上田蟻善の思想・行動・政治

杉本 弘幸

はじめに

- 1 社会主義者への道と『へいみん』の発刊
- 2 「要視察人」上田蟻善
- 3 上田蟻善のネットワーク——葉屋仲間・大蔵流狂言・大衆演劇
- 4 社民党京都支部結成と京都府議員・京都市議員選挙
- 5 無産政党合同運動と蟻善の死

おわりに

「此の男は実に交際が廣い。(中略)本業は薬剤師。近頃は無産党市会議員として活躍してゐる。だが如何なるブル議員もシャッポをぬがざる得ないほど、色街に人気がある。劇評家に交つて、天下の劇壇を論じるかと思ふと、その翌日はマルクスを談ずる。その又翌日は、狂言をやると云つた具合の男だ。(中略)朴訥さを持った愛嬌と、火の様な意気とで、あらゆる人に愛されて、各階級を出入してゐた」⁽¹⁾ 片山博通「上田蟻善君の死を惜しむ」

はじめに

本稿は、普選期の無産政党地方議会議員の支持基盤形成を社会民衆党（以下、社民党）から京都市会議員となった上田蟻善（以下、蟻善）の1914年から1931年までの思想と行動を事例に明らかにするものである。

日本近現代史における政党や政治家の選挙に関する研究は、活発になっている⁽²⁾。しかし、本稿の対象とする普選期において政党や政治家の支持基盤の実態に迫った研究は史料的制約から多くはない。近年では既成政党に関しては、愛知県に加藤鏝五郎などを事例とした手塚雄太の研究と、千葉県の川島正次郎を事例とした車田忠継の研究が支持基盤分析として最も詳細なものである⁽³⁾。一

(1) 『観世』2-8, 31・9, 36頁。

(2) 研究史の詳細は、楠精一郎「日本政治史における選挙研究」（『選挙研究』14号, 1999年）、小宮一夫「日本政治史における選挙研究の新動向」（『選挙研究』27-1, 2011年）。

(3) 手塚雄太『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容』（ミネルヴァ書房, 2017年）、同「第一回普通選挙における選挙運動」（『史潮』新84, 2018年）、同「政党組織と後援会」（『歴史評論』817号, 2018年）など。車田忠継『昭和戦前期の選挙システム』（日本経済評論社, 2019年）。研究史は以上の研究を参照。

方、普選期にあらたに登場した無産政党の支持基盤に関する研究はどうだろうか。まず無産政党の選挙分析を行ったのは、普選第1回総選挙以降の福岡県を中心とした無産政党の動向を分析した小西秀隆である⁽⁴⁾。次に山室健徳は新潟県3区における三宅正一の動向を選挙分析を通じて明らかにした⁽⁵⁾。また、藤井徳行と小南浩一は兵庫県下の無産政党の動向を中心に、1927年の県会選挙と1929年の市町村会選挙や兵庫県3区の政治状況を併せて分析している⁽⁶⁾。

しかし、無産政党候補者の支持基盤を選挙組織と資金面まで本格的に分析したのは、大西比呂志である⁽⁷⁾。大西は安倍磯雄の選挙組織と資金を分析した。安倍の選挙は選挙費用の縮減、費用の公開、文書・言論を中心とした選挙活動にみられる非常に合法的かつ理想主義的な選挙であった。これは資金と組織で圧倒的に優位にある選挙干渉と利益誘導を主体とした地盤・カバン・看板型の既成政党型の選挙に対抗したものだ。地方議会を対象とした研究としては、成田龍一による堺利彦の1929年の日本大衆党からの東京市会議員選挙立候補と選挙戦、市議としての活動、社会運動への関与を分析した研究がある。堺の選挙戦は各無産政党支持者の広範な支持を受け、牛込区の最高点で当選する。その後も『無産市民』というミニコミ誌を通じて、「小市民」と「無産市民」の連携を目指して活動した⁽⁸⁾。また、須崎眞一の労働農民党から立候補した古家実三の1927年と1931年兵庫県加西郡県議選の実態を、日記や一次史料を用いて詳細に描いた研究がある⁽⁹⁾。

だが、重松正史が、侠客などの「顔役」による都市下層社会動員の分析を前提として、社会主義者から出発した和歌山立憲青年党を創立した瀧上巨志、和歌山市会で無産政党から市会議員となった岡崎昇などを検討し、和歌山の「大正デモクラシー」的運動の中心にいた彼らも、被差別部落や水平運動に関わりながら、侠客や相撲など国粋会的勢力にも深く関与したことを指摘している⁽¹⁰⁾。加藤千香子は普選後の神奈川県川崎市において、普選で市会に参入した階級運動の担い手に限定されない新中間層や大工場の雇用労働者などの「無産派」が、自治の担い手になった一方、左翼無産勢力や都市下層の人々、女性などが排除されたと論じた⁽¹¹⁾。大岡聡は普選後都市における「無産」を標榜し、無産運動、労働運動に限らない人々がその代表者を名乗り、都市社会の様々な区や町内会レベルの行政・自治組織にも進出していくことを明らかにした⁽¹²⁾。そして、中村元はこれらの研究と

(4) 小西秀隆「普選第一回総選挙前後における無産政党の組織と動向」（『年報・近代日本研究5』山川出版社、1983年）など。福岡県を対象とした小西の研究成果は同「地域における無産政党運動」（『福岡県史通史篇 近代社会運動（一）』2002年）にまとめられている。

(5) 山室健徳「一九三〇年代における政党基盤の変容」（日本政治学会編『日本政治学会年報1984』岩波書店、1985年）。

(6) 藤井徳行・小南浩一「兵庫県議選における第一回普通選挙の状況」（『選挙研究』10号、1995年）。小南浩一「兵庫県における第一回普通選挙の研究」（『歴史と神戸』40-2、2001年）、同『近代日本の選挙と地域政治構造の変容』（兵庫教育大学博士学位論文、2008年）など。

(7) 大西比呂志「普選期の安倍磯雄」（『早稲田大学史記要』24号、1992年）。

(8) 成田龍一『近代都市空間の中の文化経験』（岩波書店、2003年、初出1988年）第3章。

(9) 須崎眞一「古家実三の歴史的位置を考える」（上）（下）（『古家実三日記研究』3-4号、2003、2004年）。

(10) 重松正史『大正デモクラシーの研究』（清文堂出版、2002年）第2章、第5章。

(11) 加藤千香子「都市化と『大正デモクラシー』」（『日本史研究』464号、2001年）、同「1910～30年代川崎における政治状況の変容過程」（大石嘉一郎・金澤史男編『近代日本都市史研究』日本経済評論社、2003年）。

(12) 大岡聡「戦前期都市の地域と政治」（『日本史研究』464号、2001年）、露天商倉持忠助の政治的、社会的活動の軌跡を描いた、同「昭和恐慌前後の都市下層をめぐって」（『一橋論叢』118-2、1997年）。

源川真希の「普選体制」論⁽¹³⁾を踏まえ、八王子市における普選期の無産政治勢力やその周辺の人々の動向を綿密に叙述し、従来の政治社会秩序から疎外された人々が制度外的にも主体化し、都市社会の変化とあいまって、無産運動、労働運動に限らない人々を含み込んだ無産政治勢力の都市自治体の制度的参加がなされるということを指摘した⁽¹⁴⁾。本稿でも、これらの研究に学び、狭義の選挙支持基盤や労働・社会運動分析のみではなく、蟻善の様々な社会的ネットワークを広く支持基盤と考え、明らかにしたい。

本稿の対象である蟻善については、京都の社会運動通史の中で、断片的に触れられている⁽¹⁵⁾。また、小松隆二と太田雅夫によって、蟻善の発行した個人誌『へいみん』が史料紹介され、おおまかな履歴も明らかにされている⁽¹⁶⁾。さらに、田中真人が蟻善関係の史料紹介を行っている⁽¹⁷⁾。拙著でも京都市の失業救済事業への関与を言及している⁽¹⁸⁾。芦田丈司が岩崎革也への蟻善からの来簡も検討している⁽¹⁹⁾。しかし、いずれも、史料紹介と活動の断片的な叙述であり、蟻善の生涯を通じての思想や行動、支持基盤については未検討である。

以上、蟻善はその思想や行動、ネットワークを通時的に追うことが可能な数少ない社民党所属の地方議会議員なのである。本稿が彼を対象とする理由はここにある。それでは、彼の思想と行動を追いながら、そのネットワークと支持基盤を検討していくこととしよう。

※頻出史料は、『京都日出新聞』→『日出』、『大阪朝日新聞京都滋賀版』、『大阪朝日新聞京都版』→『朝京』、『京都日日新聞』→『日日』、『社会民衆新聞』→『社民』、『社会運動通信』→『社通』、京都市歴史資料館所蔵写真版「上田（久）文書」1「オヤヂの日記」→「オヤヂの日記」、同「上田（久）文書」2「日記」→「日記」、とし、以下（『日出』28・1・2）と略記する。なお、引用資料には誤字・脱字が見られるが原文通りとし、特に（ママ）は付記していない。

1 社会主義者への道と『へいみん』の発刊

(1) 初期社会主義者としての登場

蟻善は1892年3月31日に生まれた⁽²⁰⁾。実家は京都市東洞院三条にある口入業の老舗上田屋である。18歳で京都薬学校（後の京都薬学専門学校）を卒業し、京都帝国医科大学医院薬局を経て、京都市三条富小路にウエダヤ薬局を開業した（『日出』31・7・14）。管見の限り、最初に彼が史料に登場するのは、加藤時次郎の刊行した『生活の力』である。1914年7月20日付の書簡が転載さ

(13) 源川真希『近現代日本の地域政治構造』（日本経済評論社、2001年）。

(14) 中村元『近現代日本の都市形成と「デモクラシー」』（吉田書店、2018年）第1章-第3章。

(15) 渡部徹編『京都地域労働運動史（増補版）』（京都地域労働運動史編纂会、1969年）。以下、『運動史』とする。

(16) 小松隆二A『大正自由人物語』（岩波書店、1988年）67-68頁、同B「上田蟻善」（『増補改訂日本アナキスト運動史人名事典』ばる出版、2019年、119頁）。

太田雅夫A「上田蟻善と『へいみん』」（『初期社会主義研究』8号、1995年）、同B「上田蟻善」（『近代日本社会運動史人物大辞典』1、日外アソシエーツ、1997年、449-450頁）。

(17) 田中真人「上田蟻善の文書について」（『京都市政史編さん通信』14号、2003年）。

(18) 拙著『近代日本の都市社会政策とマイノリティ』（思文閣出版、2015年）第5章。

(19) 芦田丈司『京都丹波の岩崎革也』（文理閣、2019年）195-206頁。

(20) 松尾尊允編『社会主義沿革』（『続現代史資料1』みすず書房、1984年）所収（以下、『沿革』）。『特別要視察人状勢一斑第九』660頁。

れている。すでに彼は『へちまの花』と『新佛教』の読者であり、「『へいみん』と申す薄つぺらなものを（内容）もこしらへまして、商売上の広告とともに主義の弘布に努力しております」と述べている（『生活の力』9号、14・10・3、7頁）。さらに『平民新聞』に9月1日から30日の間に1円寄付している（『平民新聞』1号、14・10・15、6頁）。また『へちまの花』に「これはむかしのこと」という反戦詩を書いていた（『へちまの花』9号、14・10・1、2頁）。「ケモノのいさかひ（欧州出兵をとふる人）」という詩でも、蟻善の飼う犬の喧嘩をはやす人々と第一次世界大戦への参戦論を叫ぶ人々をかけて揶揄している（『新佛教』16-3、15・3・1、286-287頁）⁽²¹⁾。

各種社会主義関係雑誌への投稿や『へいみん』の刊行によって、蟻善の活動は特別高等警察（以下、特高）にマークされ、「大正三年七月五日ヨリ『へいみん』ト題スル出版物ヲ発行シ毎号不穩当ノ記事ヲ掲ケテ各地ノ同志ニ之ヲ配布シ殊ニ東京、大阪、神奈川方面ニ於ケル重ナル同志ト親交ヲ結ヒ出版物ノ原稿又ハ意見ノ交換ヲ為セル等大ニ注意ヲ要スルモノアリ左ニ重ナル行動ヲ掲ク（イ）大正三年九月十三日東京在住堺利彦ノ訪問ヲ受ク（ロ）在京大杉栄、荒畑勝三カ「平民新聞」ヲ発行スルニ当リ金一円ヲ寄附セリ（ハ）大正四年三月一日大阪在住高田集蔵ノ訪問ヲ受ケ其ノ際「クロボトキン著 法律と強権」其ノ他同趣味ノ雑誌二種ヲ同人ニ貸与セリ（ニ）大正四年三月二日東京在住百瀬晋、荒川義英同道ニテ訪問ヲ受ク」（『沿革』、『特別要視察人状勢一斑第五』414-415頁）と、各地の社会主義者との交流を行っている様子がわかる。

しかし、「大正三年七月五日ヨリ『へいみん』ト題スル出版物ヲ発行シ貧困者、労働者ニ同情スル記事ヲ掲ケ各地同志ニ之ヲ配布シ殊ニ在京大杉栄、荒畑勝三、堺利彦及是等一派ニ属スル者並大阪、神奈川方面ニ於ケル同志ト親交ヲ結ヒ出版物又ハ主義ニ関スル意見ノ交換ヲ為シツツアルノ状況ナリシカ『へいみん』ハ同年六月一日第二巻第四号発行後休刊シ居レリ」（『沿革』、『特別要視察人状勢一斑第六』455頁）とあり、『へいみん』は、1914年7月5日に1号を発行し、1915年6月1日の4号発行後休刊となったようである。

(2) 『へいみん』の内容と反響

『へいみん』2号は小松隆二が所蔵している（前掲、太田A、80頁）。小松は「人の為めを計って恩と思ふのも間違っているが、元来他人のために計る位馬鹿なものはない。犠牲とか献身とかいふことは、大正以来サッパリ流行らぬことになってゐる」「労働者は美麗なる絹布を織る、而も常に檻棲を纏ふ。労働者は上等客車及自動車を作る、而も常に徒歩す。労働者は大学及図書館を建つ、而も依然として無学」という、蟻善の文章を紹介し、「社会を斜にみる程度に抑制したりしているように、まだ思想や運動の宣伝を直赦に行うものではない。むしろ多少与太る余裕をもち、当局の反応を探ったりして、刊行そのものに意味を認めて世に送りだしたものである」と位置付けている（前掲、小松A、67-68頁）。

『へいみん』の3号は、岩崎革也書簡のなかにあった⁽²²⁾。タブロイド判4ページで縦4段組であっ

(21) 蟻善はこの詩に愛着があり、ほぼ同様の内容の詩を「やれ、やれ、やれといふ人よ」（『へちまの花』14号、15・3・1、3頁）、「犬の喧嘩」（『へいみん』3号、15・4・25、2頁）、同内容の散文を「犬の喧嘩」（『生活の力』14号、15・2・20、5頁）として掲載している。

(22) 南丹市文化博物館所蔵。本稿では同志社大学人文科学研究所所蔵マイクロフィルムを閲覧した。

た。1 ページの上段には、『問「何しよる為に、〔へいみん〕なんか出すんぢゃ、アーン』』『答「道楽息子に放蕩の理由をたづねる馬鹿がありますかいナ』』の問答を掲げている。蟻善は能や狂言、芝居にも精通しており、ユーモアのセンスもあったようである。1 ページには、高島米峯「車夫と縄暖簾の主人」、オヤヂ（上田蟻善）「たかい油を買ふ正直な町人の話」、2 ページには、オヤヂ「犬の喧嘩」など、3 ページには、貝塚洪六（堺利彦）「粗末にした命」などと実家である口入業上田屋などの広告、4 ページには、編集後記にあたる「オヤヂ申さく」と広告がある。2 ページの余白には、「ウエダヤ売文部一引札広告並に新聞雑誌の原稿作成並に編集、和漢欧文の翻訳詳細御問合せ次第申上げます」と、堺利彦の売文社をまねて、売文業の広告もある。さらに医師の処方があれば、実費投薬、施薬も行い、無期限貸与もするとしていた（『へいみん』3号、15・4・1、4頁）⁽²³⁾。

『へいみん』の反響はかなりあったようで、親交のあった曾我廻家五郎の惣見物に間に合わせた4号は5,000部印刷したという（『へちまの花』17号、15・6・1、21頁）。岩崎重也にも、1915年4月25日書簡で、『へいみん』の1号、2号を送付したので見てほしいと書いている。現在『へいみん』の1号と4号の所在はわからない。

こうした蟻善の活動は、「『平民新聞』と同時頃、若しくはそれ以前から発刊され、猶継続されている京都の上田蟻善君の『へいみん』、埼玉の白倉甲子造君の『微光』、東京の西村陽吉君の『青テーブル』、加藤時次郎君の『生活の力』なども、多少の色彩を帯びている」（『近代思想』復活号（3巻1号）、15・10・7、39頁）と認識されていた。

2 「要視察人」上田蟻善

(1) 「要視察人」指定

神奈川県の中村勇次郎が『解放』第一報（1915年5月）を発刊した。彼は創刊の辞で、「僕等の団結を強固ならしめ、強力ならしむる適当な方法、即ち新たなる同志の発見、先輩同志との連絡、自分等の研究及修養等を計るためにここに小雑誌『解放』発行の議が起った」と述べていた（『沿革』、『特別要視察人状勢一斑第五』410頁）。蟻善は、これに応じて『解放』第二報の「通信欄」に、次のような投稿文を寄せている。「近年にない心強い、嬉しい充実した強固な感情が私の頭に湧出した。それは今のさき解放を手にして読み下して行く間の実感であった。（中略）こうした運動は各自にやらなければならない、人頼みでは駄目だ。「百年河清を待つ」とは愚の至りです。さうして団結といふ事が大切です。団結などというとすぐ〇〇の方々は眼を光らされますが今日いやしくも二人以上の人間が社会を構成する以上団結といふことが、無かつたまるもんですか、団結とか結社とかをならぬといふ人は国家の存在を是認せない人間です。非国民であります。そんな人間はドシドシ改良してやる必要があります。アナタ方もしつかりやって下さい。ワタクシ達もやります」（『沿革』、『特別要視察人状勢一斑第六』455頁）と彼なりの心意気を述べていた。蟻善は山本銅山

(23) 実費投薬は以前からのようで、『へいみん』の1号か2号かは不明だが、「このオヤヂ商ひといふ事をしらず、というて只でくれる勇もなし」と『へいみん』にあると紹介されている（『生活の力』14号、15・2・20、5頁）。さらに蟻善は加藤時次郎の実費診療所が京都に来るといふ『大阪毎日新聞京都附録』の記事を紹介している（同、6頁）。後にこの新聞記事が紹介されている（『生活の力』15号、15・3・5、6頁）。

の『飼山遺稿』で、クロボトキンの『相互扶助論』を読み（『オヤヂの日記』15・9・15）、臨濟宗の公案集である「碧巖録を読む、少々落ち付いたやうな気分になつた。こんなものは折々読んで見るものなり」と書き（『オヤヂの日記』15・9・21）、雑誌『廿世紀』『新社会』（『オヤヂの日記』15・10・3）も読んでいた。彼は、「ホントのオレ」と題し、「クスリ売るオレと、原稿書くオレと、バーに行くオレといつたいどつちがほんとのオレだい」（『へちまの花』17号、15・6・1、17頁）と書き、「留主中に若林騰造君の手紙を持つて、吉見君が来た、君も工廠を逐はれのなさうな。犠牲者となつたのである。母は『見すばらしいケツ体な奴が来た、あんな者でも友達かい。きたならしい……』と仰せられる。尤でもあるが、さりとては、嗚呼ー」（『オヤヂの日記』15・9・15）と自らの主義と生育環境との差異、そして周囲の無理解に苦悩や葛藤を抱えていた。

蟻善は特別要視察人として監視されており、岩崎革也宛の1915年9月8日付の葉書で、「『へいみん』も大典過まで休刊するつもりです理由は御察しの及ぶところと存じます」と記し、『新社会』の原稿では「お祭しの通り、随分面倒があつて弱つています。然し屁古多禮たのではありません。此秋の大典で物々しいお取扱を受けている」（『月刊新社会』2号、15・10・1、29頁）とも述べていた。日記においても「僕が先々月来、甲種要視察人に遍〔編〕入された事を秘密に知り得た。甲種要視察人と申せば注意人物の最高位に属するものである。一体全体高等警察なんかは僕をどういふ風に見てゐるのであらう。真に僕を了解して、斯く取扱ふならば、少しは恕すべしとするも、實際彼等公僕達は、横遍なる眼を以て視、僻んだ心理状態を以て人を解するのだから実に困る次第である。日本といふ国家をのみを思ふ者を憂国者とし、国家及び国民を思ひおる者を危険視するのは聞へ申さぬ次第である。国民を度外視しても国家のみを思へば曲事も善と解され、国民の為を思って立つ者は、正義も却て不義と目される。慨嘆に不堪とは斯の事である。然れ共、吾人は『国家と国民と正義とを、同時に愛さなければならぬ』事を死ぬ迄主張する」（『オヤヂの日記』15・9・10）と吐露していた。

（2） 特別高等警察の監視とアナーキスト

蟻善の日記には特高の監視の叙述もある。1915年9月14日条には、「大阪の若林騰造クンの紹介状を持つて住君といふ中老人がやつて来て逢ふて話が承り度いといふ。顔を洗ふのを後にして一時間あまり話し合ふ（中略）枯川、秋水等のことを詳しく知り居り、警察内部の方針や、状況を説く事実に詳（つまびら）かである。どうも怪しい」（『オヤヂの日記』15・9・14）と堺利彦や幸徳秋水のことを聞くスパイの記述があり、同年9月22日の日記には「上田警部（英太郎）私服にて来り、種々の事を、種々の事に托して尋問しよる、よい加減に相手になつて追ひ返す」（『オヤヂの日記』15・9・22）と特高が自宅に出入りしている。また、同年10月7日には「『生活の力』の復活号が舞ひ込む、嬉しく読む『へいみん』の事をチヨツト讚歎してある。孰れ近日亦高等課からでも見えるであらう」（『オヤヂの日記』15・10・7）と、諧謔をこめている。同年10月15日には「夜また上田警部来り『住』〈スミ〉に就て聞きくさる、『住』は愈々その筋の廻し者らし、吉見兄が工廠を出されたのも全く『住』の報告による、怪しからぬ男なり」（『オヤヂの日記』15・10・15）と、刑事の訪問と特高のスパイの存在も指摘している。同年11月1日には、宇治の火薬庫の爆破予告があり、蟻善宅に監視がつく。その様子を「留主中にも昼間にも犬が尋ねて来つた。夜

に入つては店頭で長時間制服の巡査が立つてゐたといふ事ぢや」(『オヤヂの日記』15・11・1)と述べている。さらに同年11月5日には「富小路にタンテイ殿が立ちん坊をして、朝から晩までこちらを向いて御座る。芋屋の電柱を背中を合せて、体屈さうな顔をしてゐる。芋屋の二階(こゝから僕とこは一目)を今月中拾円で貸してくれと、その犬が云つてゐると、芋屋のオヤヂさんが告げて来た。月給の他に、特別日当を受けた大の男二人が、おとなしい僕を監視するなんて、実以てお気の毒様は両方だ。兄貴も警察へ呼び出されて僕に対する注意を与へられた」(『オヤヂの日記』15・11・5)とあり、家屋自体も監視対象になった。富小路、麩屋町から監視がおり(『オヤヂの日記』15・11・6)、同年11月7日には「今日此地益々其筋の圧迫劇しく日誌書く気にもなれず」(『オヤヂの日記』15・11・7)と書くに至る。また、口入屋上田屋をついだ兄の安二郎にも「『実家の方へも刑事が来て困る、しまひにはオドシ句調でやる、実に閉口するから何とか謹んでくれんと困るぢやないか』」(『オヤヂの日記』15・11・13)とさとされたと書いている。

『へいみん』の休刊後は「引続キ言動ヲ慎ミ(中略)専心業務ニ従事シ、偶々同志ノ訪問を受クルコトアルモ這ハ単ニ従来ノ関係上面接スルニ止マルモノと認メラレ」(『沿革』、『特別要視察人状勢一斑第七』496頁)とされ、目立った活動はしていなかった。しかし、特高警察の監視は続いており、1918年8月13日に大杉栄が蟻善を訪ねた様子も「十三日に京都ニ赴キ(京都ニ趣キシモ調金ノ目的ナリシモノノ如ク山鹿泰治(甲号)、上田蟻善(乙号)、続木斉(丙号)、等数名ノ同志ヲ訪ネ(山鹿ハ不在ノ為面会ヲ果タサザリキ)上田蟻善ヨリ歓待ヲ受ケタル上旅費トシテ金六円五十銭の供与ヲ受ケタリ)」(『沿革』、『特別要視察人状勢一斑第九』718頁)と報告されていた。この前後の様子も岩崎革也宛の1918年10月11日付書簡に「此間の米騒動以来その筋は又々間違つた活動をほつ初免ました。岩前と申す東京裁判所の検事ドンがわざわざやつて来て、ヨタスケの狂言師上田蟻善乃身元調べや聞取書を作るのに四つも日を費すんです。そして肝心のそのころには僕は伊吹採葉旅行に滋賀県のお役人サマ達と行つてゐたのです。馬鹿らしいぢやありませんか。大杉がその後を訪ねて来たので、驚いて滑稽すぎる警戒をしてみます」と皮肉っている。

1919年2月27日には、山鹿泰治・横井仙之助ほか数名のアナーキストとともに、クロボトキンの『パンの略取』の翻訳本と『サンジカリズム』と題した印刷物配付により、出版法違反で検挙されている。同年6月13日に京都地裁で判決がでた。山鹿泰治が禁固2年、深尾己之助が同2ヵ月、蟻善は懲役4ヵ月。蟻善は上告したが、棄却された(『日出』19・3・1-2、『沿革』、『特別要視察人状勢一斑第九』659-660頁)。逮捕された後、蟻善は1920年1月3日に岩崎革也に葉書を送った。「早速別荘行祝詞うれしう存じ奉る 新春着赤札 正に兎等の嬉々とするところより風流の春を送ることを得るわけでも軽きホコリを覚え申候 六日に多分招待のことと思ひ申す 桜が咲いて桜散り藤のツボミのふくらむ頃又もや俗界へ降りることと存じそ、その節はぜひ大いに飲み得ることを思ひそ」とあり、革也が送った書簡に応えたもので、「別荘行」とは刑務所のことである。1月6日から4ヵ月なので、桜が散り、藤のつぼみの膨らむ頃に出所になるということであろう。逮捕後も、日記の1921年1月23日条には、「スパイの渡辺と池田とが来た」と云ふ。ウルサイ虫ケラなり」(『日記』21・1・23)とあるし、同年2月8日条には「スパイ池田来る。ソロ〜と本音をふき出す、虱の卵子のやうなおトコなり」(『日記』21・2・8)とあり、特高の監視対象になっていたようである。

蟻善は、1922年5月に設立された京都印刷工組合に関与していた。この組合は京都のアナーキズム運動の拠点であった（『運動史』200頁）。後に蟻善が関与する1929年6月の関西毎日新聞社争議を通じて、アナーキスト仲間の多い印刷工を組織して、印刷工友会に関与したとあり、アナーキストとの交友は続いていた（『運動史』637-638頁）。

3 上田蟻善のネットワーク——薬屋仲間・大蔵流狂言・大衆演劇

(1) ウエダヤ薬局と薬屋仲間

だが、蟻善の日常は社会主義者としての活動と警察の監視だけではない。まず薬屋としての商売は、順調だった。例えば、ウエダヤ薬局の1915年10月1日から29日までの総売上は889円89銭5厘だった。掛売が556円9銭5厘と半分以上を占める（『オヤヂの日記』15・10・1-29）。一応、「節期である。掛取りに出る。松次郎、英公兩人と共に式百余軒を集める（六七九・〇〇〇）総掛は三百式拾四軒千百七十余円一」（『オヤヂの日記』15・10・30）と従業員と回収をきちんとしていた。売文部も「点林堂からの依頼で、大典大嘗祭用御茶碗を模したる、記念品の説明を売文部へ申込まれ、早速純国文体にて作成す。夜松川酒店よりも大典売出しの売文を注文」（『オヤヂの日記』15・9・11）、「伊藤柏光主人見えられ、今度大典記念に発売さる、玄米製うどんの命名と説明を依頼」（『オヤヂの日記』15・9・12）と注文があった。1919年2月27日の逮捕後も商売は順調だったようで、「日本新薬株式会社の総会に出席、壱万円余の損出処分と、取締役一名の補欠選挙」（『日記』21・1・28）と株主として、総会に出席している。店舗づくりも、「ショウウインドの飾りに新しい畫や彫刻を並べるので、西洋人の通行の多い處にて飛び込んできてそれを売れと来るので閉口します。昨日も中村不折の羅漢□像を」（『へちまの花』13号、15・2・1、4頁）せがまれたり、「此項『店頭語』と題して、『ショウウインドウ』の中で大與太を飛ばしています」（『新社会』3号、15・11・1、36頁）と熱心に行っていた。

薬屋仲間との活動も頻繁に行っている。母校の京都薬学専門学校の薬剤師会に出席しているし（『日記』21・1・17）、1921年2月1日には「薬学校へ廻り、度量衡問題の会議に列す、僕の弥次的の建議がゾク〜と決議されるので愉快でたまらなかつた」（『日記』21・2・1）、同年2月4日には、「大原伊吉君をその家に訪ひ、手塚新組合長、河原林、福島宗、等の諸君と組合、及び業界の諸般の協議をする。そして手塚君の顔つなぎを兼ねて来る七日水琴亭に懇親会を開く事を決しそれ〜通告をする」とあり（『日記』21・2・4）、「結晶会の懇親会なり、幹事頗る多忙を極む、来り会する者拾六名、基本金寄附者六名を出し金高六十円に及び総額の半額を超へたり、僕の得意とするところなり、平塚□（店カ）売同業組合長を皆に紹介し、新入者田村豊君をも一同へ引き合す（中略）僕の寄附せる校書三名に未曾有の盛会となる。アリサル定価にて八百余円を売りつけたので僕の一方の目的は達した」（『日記』21・2・7）など、同業者との会合をしている。1923年11月25日に第2回近畿薬業京都代表者大会があり、薬剤師の京都代表者でもあった⁽²⁴⁾。

さらに、1921年1月25日に「両替町の試験所へ行く、本草会の創立総会である、高木幸助君と

(24) 京都市歴史資料館所蔵写真版「上田（久）文書」11「第二回近畿薬業大会京都代表者会議写真（大津女学校）」1923年1月25日、「上田（久）文書」は以下『上田』と略記する。

談話中ボツ〜と集合。池田君を座長にして会則を練り上げ、幹事の選挙をする、僕、高木君、西川君、池田君、大野伝君の五名ときまる次回を二月十日第二木曜に開くことにして僕の講演は「民間薬として狐尾草の価値、并にその成分に就て」と決定しておく。松王防疫官、西技師等二十六名の入会者あり」（『日記』21・1・25）とあるように、多くの仲間と京都本草会を結成している。蟻善の発表は論文として公表している研究の発展版であろう⁽²⁵⁾。後の政治的活動の基盤として、薬屋仲間との付き合いは重要となってくる。

（2）大蔵流狂言師としての交流と「じれんま」

蟻善は大蔵流狂言師でもあり、多くの文化人や実業家たちと交流があった。大蔵流の茂山忠三郎家へ通っている。日記によると「夜再び茂山へ行く、忠三郎翁に宗論を口伝され例の如く廻り道をして二時頃（翌午前）我家の人となる」（『オヤヂの日記』15・9・13）とあるように二世忠三郎の所に通っていた。「夜良一君来り、来月十二日の府主催の紀念能に靱猿の冠者に決定した事を告げられ、□三十一日（当月）御山例会能脇狂言と三番目三井寺の能力間を頼んで行かれる」（『オヤヂの日記』15・10・26）とあり、「午前八時半片山能楽堂へ出勤する。脇狂言『清水』のアトを無事に仕終せ、三番目『三井寺』の能力をやる。大役なれども立派に仕遂げた、大向ふの受けもよかつた。四時前帰る」（『オヤヂの日記』15・10・31）とあるように重要な能楽会の狂言役者としても指名されている。能楽に対する教養もあり、能に関する座談会出席者の1人にも選ばれている（『観世』1-2, 30・10, 38-44頁）。狂言師としては片山博通に「狂言は中々大した味をもつてゐる。茂山良一、久治、千五郎、眞一等々の諸氏にない味を舞臺上に見せることもある一勿論、悪いときも多々ある」（『観世』2-8, 31・9, 36頁）といわれていた。玄人はだしたが、個性的で出来不出来が激しいというところだろうか。

また、狂言会にでると、「猿楽会第一回を片山能楽堂に開く。（中略）今日の狂言会に僕の為に、内貴氏は簾掛を片山氏、藤田氏、高橋正博氏、平井三郎氏等は幕掛りを。福田精斎、木下茂兵衛氏、山口黙川、船越ゑり三、稲垣氏、中村宗氏、戸野氏、月岡氏。若林氏等は普通席を、特に申込まれた、人数は総数三百七十余の三割以上を僕の連中で占めてくれられたは満足に慥えない」（『オヤヂの日記』15・9・18）と、多くの交友関係があった。

狂言師達とは個人的な交友もしていたようで、「上田警部と引つ違へに、茂山忠三翁見えらる、奥の間にて河道屋の蕎麦を御馳走する」（『オヤヂの日記』15・9・22）と、特高警部と入れ替わりに二世忠三郎が家に来たり、「夜茂山良一君来り、（中略）飛行機に搭上するから洋服を貸せと云ふ、一張羅の紺サージの夏服と、オヤヂ好の替チヨツキに同揃の烏打帽、カンかんカーフの深靴まで貸してあげる」（『オヤヂの日記』15・9・17）と三世茂山忠三郎の良一に洋服を貸したり、「大江の前川追善能出勤、謹之助シテ『当麻』の間をつとめる。ワキは松山の某氏、初顔合せなり。夕方久治氏見え遅くまで芸道について語り合ふ」と茂山久治（後の人間国宝善竹彌五郎）とも親交を結んでいた（『日記』21・2・11）。1921年9月25日の観世流能楽会では狂言の「萩大名」を演じている（『日出』21・9・20夕）。観世流能楽師シテ方である片山博通も「能楽界はまた一人惜しい人

(25) 上田蟻善「ノギラン「狐尾」の成分研究予報」（『薬学雑誌』389号、1914年7月26日）。

物をなくした。この人は私の片腕、両腕ともなつて色々と斯道発展の策を講じてくれたのだ。私が今まで斯道に尽力した仕事のうち、多少とも有益であったものは皆、上田君に負ふところが多い」（『観世』2-8, 31・9, 36頁）と京都の能楽界にも貢献していたようである。

ただ、そんな自分を蟻善はシニカルに眺めている。『新社会』に「来月当地の御大典奉祝能に出勤を云ってきました。見物は百圓以上を寄付した紳士ばかりださうです。世の中は妙なもんですね」（『月刊新社会』第3号, 15・11・1, 36頁）と自らの立ち位置を皮肉っている。1931年1月に市議員になってからも「じれんま」と題した詩をかいている。

紋つきの	救済を
羽織ばかまに	されたき方も
白足袋の	うちよりて
フロレタリヤを	慈善の能を
楽師とはいふ	あそばす世なり
どうせブルの	能といふ
ひまつぶしですよ	みやびのものに
さとり顔に	ひとりつも
いつてるおまえの	プロレタリアの
おまんまの種は	開放を叫ぶ
ひとたたき	太郎冠者
イクラになるか	お前にといふ
鼓うち	この口に
角帽の甥が	おぞましきこと
悲しき問ひかな	誰が云はしむる ⁽²⁶⁾

このように、蟻善の大蔵流狂言師としての活動はジレンマにみちたものだった。

(3) 曾我廼家五郎・志賀廼家淡海・沢田正二郎との交流と「にがき顔」

大衆演劇役者との交友も挙げられる。まず、曾我廼家五郎との親交である。彼の惣見物に行った時に、「惣見は豫期に三倍する大人気で……五郎君が臍の緒切って初めての惣見挨拶をしてくれまして、『上田君と同じく、僕もある主義の下に働く、自覚する舞臺の上の労働者であります』と云って呉れた時には、思わず嬉涙が浮かびました」（『へちまの花』17号, 15・6・1, 20頁）とあり、後年の田中緑紅の回想でも「曾我廼家五郎と兄弟の盃」（『京を語る会会報』41号, 65・3・25）ともあり、主義を共有する親友だった。日記にも「平民劇団和田久一（先の曾我が家五郎君）氏より通信と新聞二種を送り来る。僕の雑誌『へいみん』の四号に僕と二人立ちの写真を出したので、それが因をなして『平民劇団』が生れたかのやうに世上で言ふ人があるが、その憶測は多く當つておらない、当時（五月頃）兩人の会に今秋斯ういふ風に組織を変更するといふ話はあつたが、

(26) 『観世』2-1, 31・1, 39頁。

その時既に和田君も「平民劇団」又は「社会劇団」を名乗り度いといつてみたのである。併しさういふ訳故全く関係が無いとは申されぬ」（『オヤヂの日記』15・9・14）としている。

さらに志賀廻家淡海との交流があげられる。日記に「夜淡海君を訪ひ、劇談に花が咲き午前二時に到る」（『日記』21・1・31）と夜を徹し、劇談をする仲であった。また、淡海に「幕合に淡海に逢ふ、昨日頼みおきし新発薬品『花房』の平和節出来てあり。嬉しき人なり」（『日記』21・2・3）と仕事を頼み、「北村昇雲堂へ寄って花房の件ニ付き相談、淡海へ引幕を送り、舞台で広告さすことを決め（中略）夜夷谷座に淡海クンを訪ひ、いろゝ話す、亀鶴、舞鶴等一座の諸君を廻訪す。小時クンに幕のあつらへを依頼する」などとし、淡海とともに「夕方北村氏見える。平和節の印刷が見事に出来上った。五時半頃淡海クンを部屋に訪問して平和節の節附けを舞鶴クンと」（『日記』21・2・9）していた。その後も、志賀廻家淡海一座の座付き作家となった石橋和の門出祝いで友人の1人として、新作見物し、「後援の座談会」を開いて激励した（『日出』30・8・29）。

新国劇の沢田正二郎とは親友と称され（『観世』2-8, 31・9, 36頁）、新国劇の出世狂言である「月形半平太」が南座で上演されると新国劇の面々や吉川観方、衣笠貞之助と並んで、亡くなった正二郎の追憶座談会に参加したり、深い関係にあった（『日日』30・11・7）。その他、南座観劇会にも関与していた（『日記』21・2・5）。

このように、蟻善は仕事に、狂言に、芝居に多忙な日々をおくっていた。しかし、その生活に満足はしていなかったようである。1921年元旦の歌に

みせひらき 匙をにぎりて まる九年
よくもそんなに 握りしことかな

苦きもの 十年近くひさきおれば にがき顔する
オトコとなれり

ぢっとして たゞぢっとして クスリ売る
三十の己れに 楽しき春来〈コ〉

（『日記』21・1・1）

とあり、その悲哀をのべている。「じれんま」や「にがき顔」を抱え込む蟻善の心情が述べられている。このような薬屋仲間や狂言、演劇などを通じた多彩な交友関係が彼の支持基盤につながっていったのである。

4 社民党京都支部結成と京都府会議員・京都市会議員選挙

(1) 社民党京都支部結成と府会議員選挙

さて、蟻善が本格的に政治活動を行うのは、1927年である。市役所幹部とは交流があり、「市高級助役、大森吉五郎君来訪。七年前の台嶽籠の懐旧談に花が咲く。兩人して八月の満月の日、山頂に鶏肉を焼き、般若湯を吸ふて、開闢以来の歴史を破つて、山僧からキツイ眼玉を喰つたのある。当年の君は今や堂々たる名助役サマである。僕はやつぱり薬剤師。病院生活から、小売商人に成り

下つただけのこと、お恥かしい事である」（『オヤヂの日記』15・9・24）と述べている。そして、弁護士で自由党から衆議院議員を1期つとめ、京都市会議員、市会議長だった堀田康人と交友があり、「堀田康人氏今晚午前二時逝去、悲し」（『日記』21・1・21）、「建仁寺方丈における堀田氏葬儀に兄上と共に列す、頗るの盛儀なり」（『日記』21・1・24）とある。

社民党京都支部は「私一人で当地の社民運動に着手」（『社通』29・12・16, 55頁）と称した薬剤師吉川末次郎⁽²⁷⁾を中心に蟻善を加えて、同年1月21日に岡崎公会堂で京都支部結成大会を開催した。蟻善がなぜ、社民党支部結成に関与したかはわからない。吉川が薬剤師仲間の1人であったこと、日記に「夕方中外日報の小池水波、井上淡星の両君来店、暫く話して青年会館の安部磯雄氏の演説を聞きに行かれる」（『オヤヂの日記』15・10・17）とあり、彼のネットワークに社民党支持者がいたことは間違いないだろう。

結成大会は、安部磯雄、宮崎龍介、片山哲などが出席し、同志社大学の中島重、高橋信司も演説した（『日出』27・1・22, 『社民』17号, 27・2・5）。『社会民衆新聞』の婦人欄にこの演説会の参加記があるが、反響がとりあげられたのは、学校教員、吏員、小売商人であり、小市民層だった（『社民』17号, 27・2・5）。社民党京都支部が結成され、蟻善も支部執行役員と京都府政調査委員に就任した（『社民』19号, 27・3・6）。

同年7月14日には、京都支部執行委員会が開催され、普選で初めての府会議員選挙で、下京区から蟻善が立候補し、上京区から山口茂一郎が立候補することになった。蟻善は府議戦対策委員会の組織部長になり、選挙資金の寄付31口、155円のうち、10口50円を寄付し、その財力を示していた（『社民』27号, 27・7・3）。同月21日の支部委員会では、勤労階級の府税減免、方面委員の選挙制と有給化、府社会事業の拡張、家賃引下政策、各学区に無料診療所を設置などの政策を挙げ、選挙資金は180円に達していた（『社民』29号, 27・8・1）。社民党本部としても京都市の候補は「我党有数の当選確実さ」と考えていた（『社民』32号, 27・9・20）。蟻善は、神戸市の薬種商奥井佐市郎と大阪市の薬剤師小林知一の推薦状と『日本薬業史』（1929年）などの著書がある池田松五郎⁽²⁸⁾の推薦状を印刷していた⁽²⁹⁾。新聞報道でも生祥学区を中心に社民党員と薬剤師をたよって勢力をはっているとされた（『朝京』27・9・24）。蟻善の選挙戦は約20名の運動員がおり、蟻善自身が赤インクで真赤になった戦跡地図と作戦表をにらんでいた。さらに女性運動員が依頼書の切手貼りなどを行っていた。また選挙終盤にもかかわらず、配付する新しいポスターを数千枚つくっていた（『日日』27・9・24）。演説会も盛況であり、同情もあるからある程度までこぎつけるとも評されていた（『日日』27・9・24夕）。蟻善は「従来までの議員は（中略）唯一部少数階級の代表

(27) 吉川末次郎は1892年12月1日京都市生まれ。京都薬学校（後の京都薬学専門学校）を1911年に卒業、同志社大学政治科を1918年2月卒業、同志社大学政治科助手、国際通信社記者、大正日日新聞記者、ニューヨークのジャパニーズ・アメリカン・コンマーシャル・ウイークリー主筆、コロンビア大学政治経済学部研究科、ドイツで政治経済学専攻の後、帝都復興院と東京市政調査会嘱託を経て、1926年社民党設立準備委員、1927年に社民党中央委員、京都支部長であった（『上田』4-1「スクラップ帳」9558-506）。これらのスクラップ帳には枝番がないため、今後はマイクロフィルムコマ番号を記入する。

(28) 『上田』4-1「スクラップ帳」9558-519。池田松五郎は1931年5月の市議選に中立会派から立候補し、著作出版業としている（『日出』31・5・15）。市議選演説会ピラに「京都薬業界の名物男として全国的有名」としていた（『上田』4-2「スクラップ帳」9558-612）。

(29) 『上田』4-1「スクラップ帳」9558-509, 9558-519。

者でありまして、(中略)府民の期待を裏切り、如何に民衆の利害を無視したか」とのべ、公約は特別市制の施行による三部経済制度の撤廃、勤労者階級の府営業税、雑種税の撤廃、勤労階級のための都市計画の実行、学区と町内の衛生組合、公同組合の民衆化、小学校校舎の社会事業のための開放と無料診療所の設置があった⁽³⁰⁾。

同年9月25日の京都府会議員選挙の無産政党候補の結果は上京区(定員9)で、当選2位2,403票で神田兵三(酒醬油業, 労農党), 落選(次点)1,374票で山口茂一郎(通信記者, 社民党)。下京区(定員10)で、当選2位2,750票で奥村甚之助(鉄工業, 労農党), 落選(次点)1,446票で上田蟻善(薬剤師, 社民党), というものであり、労農党が神田兵三, 奥村甚之助が当選したのに対し、社民党は全員落選、蟻善も225票差の1,446票の次点で落選した(『社民』33号, 27・11・1, 『朝京』27・9・27)。1927年度社民党京都支部の党員数は40名だった(『昭和二年中ニ於ケル無産政党運動ノ状況』41頁)。

その後、1928年2月20日の普選第1回総選挙に社民党は支部長の吉川末次郎が立候補したが、京都第1区で2,247票で大敗した。一方、労農党の山本宣治と水谷長三郎は、京都1区で水谷が8,781票で当選。京都2区では山本が14,411票で当選し、大勝した。京都の社民党は左派の労農党と比べ、勢力が著しく劣っていた(『運動史』470-474頁)。

1925年に労働総同盟が分裂し、評議会が結成されたとき、京都では総同盟支部と傘下組合はすべて評議会に移行した。総選挙での社民党吉川末次郎の惨敗は、労働者の組織の上にとたなければならぬことが明らかになった。そして、社民党京都支部がイニシアティブをとって、総同盟京都支部の再建がはかられた。しかし、京都の社民党と総同盟の関係はうまくいっていなかった。これは総同盟側からは、京都の社民党には小市民が多く、労働者的要素が少ない結果になる。総同盟は、労働者を組織するにあたり、容共左派の組合と勢力争いをする事が多く、反共的気分が強かった。しかし、蟻善と津司市太郎ら地元の社民党幹部は、組織づくりではげしい闘争をすることがなく、とくに蟻善はアナーキズム運動に豊かな経験をもち、独自の考えで、動く傾向が多かった。また、総同盟の再組織もうまくいかず、1929年1月の実数は100名にもみだなかった(『運動史』538-551頁)。

京都市で増区問題が発生すると、小選挙区制実施が問題となった。各無産政党は候補者の地盤が左右し、既成政党に有利な小選挙区制に反対する京都無産団体協議会を28年12月12日に開催した。そして、同月18日に、山本宣治、水谷長三郎両衆議院議員、奥村甚之助、神田兵三両府会議員が各無産政党の代表と共に、内務省に陳情にいくことになった(『日出』29・2・14, 『朝京』29・2・14)。社民党は参加を表明していたが、当日に幹事会の決定で増区反対はするが、共同闘争には反対すると返答した。社民党から個人で参加した蟻善は、「私一個としては増区反対の共同闘争には賛成であり、不幸幹事会にて不参加と決定したが、おして個人として列席した。遅れて出席した上今後も本部から如何なる牽制をうけるかもしれぬから明言は出来ぬが、吾らの敵は支配階級たることに変りはないから、かくの如き共同の問題あれば、よろこんで本協議会に有志として参加したい」と満場の拍手をあげた(『無産者新聞』196号, 28・12・20)。

京都の社民党は小市民的性格が強く、労働者の支持を得ていなかった。『無産者新聞』投書の社

(30) 『上田』4-2「スクラップ帳」9559-042。

民党京都府支部4代議士歓迎会の様子によると「料理は支那料理で会費二円、こんな会に労働者がでられるものか、総同盟の主事と俺の友人もまぜて労働者はたった三人、その外はやれ医者だ、やれ財産家だとかいう紳士然たる連中が集つて、ブル政党じみたテーブル・スピーチに労働者三人は場にそぐわず、隅の方に小さくなっているより外なかった」（『無産者新聞』190号、28・11・20）とあり、その性格がよくわかる。

（2）京都市議員選挙

普選初めての京都市議員選挙は1929年5月21日が投票日だった。各党準備を進めていたが、無産政党間の連携は無かった。社民党は無産政党選挙対策協議会を提唱し、日本大衆党、労農大衆党が賛成したので、同年4月21日協議会が開催された。しかし、無産政党間で排撃しあわないと申合せがあったのみだった（『朝京』29・4・22）。

社民党の市議員候補者は、上京区丹羽増次郎、下京区津司市太郎、中京区上田蟻善、東山区岩本健一と決定した。蟻善は投票では2番手で早々と内定したが、その独特のユーモアと、実業同志会に席を置いていることが問題視され、まじめにやることと、実業同志会から除籍することを条件に市議員に立候補することになった（『運動史』552-553頁）。蟻善は生粋の京都人で「古くより社会運動家として知られて（中略）京都支部創立には吉川末次郎氏を援助して功績を残している（中略）この地にての解放運動には常に欠くべからざる人」と述べられている（『社民』6号、29・5・25）。この時期になると社民党京都支部の黨員数も、781名になっていた（『昭和四年中ニ於ケル社会運動ノ状況』892頁）。

蟻善の選挙戦はまず、友人9人を代表とする一平会という組織から推薦をもらい、当時の京都の代表的な大衆食堂スター食堂グループからも推薦されている⁽³¹⁾。また、実家の口入屋上田屋の関係から京都市職業紹介所組合有志からの推薦状⁽³²⁾、上田屋をつぎ、中京区日彰学区の学区会議員でもあった兄の安次郎の推薦状もあった⁽³³⁾。奈良県薬剤師会有志の京都薬学専門学校出身者8名の推薦もうけており、社民党関係では安部磯雄、亀井貫一郎、菊池寛、高山義三、中西国太郎の推薦状があった⁽³⁴⁾。蟻善は「府議選に一敗地に塗れ今度が雪辱戦とあつて豊富なる弁士と培養せる地盤をもつて獅子奮迅」⁽³⁵⁾と称されていた。

そして、表1にあるように中京区内の各学区を丹念にまわり、中京区選挙区内の大衆全てに広範

(31) 『上田』4-2「スクラップ帳」9559-026。

(32) 『上田』4-3「スクラップ帳」9559-133。

(33) 『上田』4-2「スクラップ帳」9559-023。武内正之編『京都市各学区名誉職大観』（公同衛生教育新報社、1930年4月20日）213頁、以下、『名誉職大観』と略記する。京都市学区調査会『京都市学区大観』（1937年）「人物篇」38-39頁。田中緑紅の回想によると「六角堂の東北に上田屋と云ふ口入屋があり京都では一番盛大にやっていた口入屋で（中略）上田屋は出替前は店前が通行出来ないほどの人出でした（中略）市議でした上田蟻善君はこの息子でした。（中略）此出替りの時は、奉公人を連れて雇用先に行き「上田屋で御座います」と歩いて置いて戻り又次の人を連れていき、市議になっても豪い人と彼を知る人々は話し合っていました」（『京を語る会会報』41号、65・3・25）とあり、実家上田屋の支援や家業の手伝いなどから派生するネットワークも蟻善の支持基盤の1つであったろう。

(34) 『上田』4-2「スクラップ帳」9559-023。

(35) 『上田』4-3「スクラップ帳」9559-107。

表1 上田蟻善の京都市会議員選挙演説会開催場所（1929年5月）

開催日	場所（備考）	応援弁士
5月3日	千本稲荷神社前一丁東入出世倶楽部	
5月4日	乾校	
5月5日	銅駝校	
5月6日	初音校	
5月7日	明倫校	
5月9日	三条千本西三丁教宣寺	
5月10日	裏寺町（新京極六角東入下ル）永楽亭（旧称受楽亭）	米窪満亮（前国際労働会議代表）
5月11日	城巽校，柳池校	
5月12日	日彰校	
5月13日	第二朱雀校，佛光寺千本一丁西入親友亭	
5月14日	本能校，西院土井ノ内（嵐電停留場東半町）北末工場	
5月15日	富有校，六角烏丸北六角会館	
5月16日	生祥校，押小路行幸町西北角天理協会	
5月17日	竹屋町堀川東入明善寺，龍池校	
5月18日	乾校，裏寺町（新京極六角東入下ル）永楽亭（旧称受楽亭）	
5月19日	朱雀第一校（他候補6名との共同開催政見発表演説会），姉小路大宮西入御嶽協会，旧二条千本東入上ル二条天理協会，朱雀第一校	
5月19日	三条青年会館	鈴木文治（衆議院議員），西尾末広（衆議院議員），亀井貫一郎（衆議院議員），米窪満亮（前国際労働会議代表），赤松克磨（社会民衆党本部），賀川豊彦，和田操（京都市会議員）
5月20日	三条青年会館	鈴木文治（衆議院議員），西尾末広（衆議院議員），米窪満亮（前国際労働会議代表），赤松克磨（社会民衆党本部）
5月20日	中新道四条半丁下清水染物工場	鈴木文治（衆議院議員），米窪満亮（前国際労働会議代表）

出典：『上田』4-1「スクラップ帳」9558-494，4-2「スクラップ帳」9558-594，9559-017，025，27-41，45-46，49-57。

な支持を得ようと，全29ヶ所で演説会を行っている。演説会は新京極六角の寿楽亭，仏光寺千本の親友亭でも開催し，少人数の有力支持者相手の集会も行っていた。また，日彰学区民にむけては「唯一の日彰学区出身候補」というポスターも作っている⁽³⁶⁾。

蟻善の主張は「勤労階級・小市民の本当の代表」とし，第1に市長の公選，市参事会の廃止，普通選挙の徹底，第2に富豪に重税，勤労階級に減税，第3に電灯，ガス，水道，電車賃の値下，第4に衛生組合，公同組合，各種公共団体の民衆化，第5に市立無料診療所，産院，託児所の新設・増設，第6に勤労階級本意の都市計画の実行，第7に土地売買業者の市会議員就任禁止，最後に自治体特許会社関係者の市会議員就任禁止だった⁽³⁷⁾。

この市会議員選挙は激戦であったので，既成政党の個別訪問や買収への注意を喚起するチラシが

(36) 『上田』4-2「スクラップ帳」9558-607。

(37) 『上田』4-3「スクラップ帳」9559-134。

表2 京都市会議員選挙中京区当選者（1929年5月）

氏名（年齢）	政党・会派	職業・経歴など	（区役所） 選挙会	（第1朱雀） 第1分会	獲得 票数	選挙 費用 （円）
福田関次郎（38）	民政党・新	会社員・民政党本部幹事	1,018	840	1,858	857・420
中川源一郎（38）	民政党・新	会社員・府会議員・民政党京都支部 政務調査会副会長	782	386	1,168	866・470
石田芳之助（42）	民政党・新	薪炭商・朱雀学区学区会議員・下京 区所得税調査委員	875	256	1,131	635・950
森田 茂（58）	民政党・再	弁護士・代議士・前衆議院議長	124	934	1,058	659・210
浅山富之助（65）	中立・再	材木商・中京区連合組合理事長・前 市会議長	946	90	1,036	651・310
八木伊三郎（48）	政友会・再	友禅製造業・政友会京都支部幹事長	325	648	973	629・270
上田 蟻 善（38）	社会民衆党・新	薬剤師	230	718	948	785・670
郷 原 瞭（42）	中立・新	医学博士・大宮病院院長	200	575	775	750・420
岡村秀太郎（45）	国民同志会・再	新聞社長・醤油製造業・中京区連合 組合副理事長	36	656	692	740・325
高山興三吉（54）	中立・再	京染悉皆業・元府会議員・悉皆同業 組合長	48	625	673	854・160
半 谷 玉 三（39）	労農大衆党・新	木型工、労農大衆党執行委員	498	163	661	843・750
井 上 庄 三（47）	政友会・新	雑貨兼職業紹介業、朱雀学区学区会 議員・公同組合長	619	37	656	860・490

出典：『日日』29・5・23、『日出』29・5・23、『上田』4-3「スクラップ帳」9559-077。

社会民衆新聞社から発行されていた。内容は『京都日日新聞』の同年5月20日付折込の蟻善が当選圏内にあるという記事を引用し、「投票日を目前に茲数日間、個別訪問又は〇〇等をの奸策を以て投票を集め最も有望と称される上田蟻善の得票を奪取せんと種々陰謀をめぐらすものありて、決して全君の楽観を許さざるものあり」と戸別訪問や買収への警戒を呼び掛けるものだった⁽³⁸⁾。蟻善のポスターにも「危機至る!!! 危機至る!!! 既成政党の買収一個別訪問の中に堂々力戦せる一我党の快男子 清廉なる貴下の義侠的一票で市制浄化のためにホームランをかつ飛ばせ!!!」⁽³⁹⁾とあった。さらに社民党左京分会からも「選挙革正のタメに金銭で買収なしたる他党の違犯行為を速刻御通報を乞ふ」と選挙違反摘発を求めるピラもまかれていた⁽⁴⁰⁾。

結果、表2のように蟻善は京都市中京区定員12名、立候補30名の激戦の中、見事7位948票を獲得し、社民党候補者で唯一当選を果たしたのである。市議選の無産政党候補者の最高得票であった（『日出』29・5・23、『朝京』29・5・23）。蟻善は「京都府薬剤師会代議員、京都賣薬実業組合副議長の現職にあるが、京の『オヤヂ』で業界に通ってゐるのは周知の事實、つとに社民党京都支部設立に力を尽し、現に執行委員として重きをなし（中略）無産勤労大衆に呼びかけ」と、薬業

(38) 『上田』4-3「スクラップ帳」9559-007。

(39) 『上田』4-2「スクラップ帳」9559-018。

(40) 『上田』4-3「スクラップ帳」9559-132。

界からの支持と無産政党人気による当選とされていた⁽⁴¹⁾。開票区ごとの得票数をみると商業地域周辺である中京区役所の選挙会で230票、無産階級の多い新市街地周辺の第1分会（第1朱雀）で718票併せて948票であった。蟻善の選挙戦は地元の商業地域を固めつつ、それに無産政党人気を加わり、新市街地周辺の無産階級にも得票し、当選したものといえよう。

こうして男子普通選挙下初の京都市議員選挙は定員56名に対して、156名が立候補した大変な激戦であった。結果、党派別の獲得議席数は民政党23、中立18、政友会8、立憲公民党1、国民同志会1、労農大衆党3、社民党1、旧労農党1であった。民政党が大勝し、政友会が大敗し、無産政党議員5名が市会に進出した⁽⁴²⁾。

その後、他の無産政党議員と同年6月2日に無産議員団を結成し、議長候補に蟻善を押し立てることになった（『社民』7号、29・6・20、『朝京』29・6・4、『日日』29・6・4）。蟻善自身も「わが党の指導精神を没却せぬ範囲において、各無産議員と提携」と述べていた（『日出』29・5・23）。同年6月7日市会で議長選を行い、森田茂27票、浅山富之助24票、蟻善に4票がはいったが、決戦投票で無産議員団は退場し、森田茂が市会議長に就任した（『朝京』29・6・7）。蟻善38歳の春であった。

（3）社民党京都市議員上田蟻善の活動

こうして、蟻善は無産政党社民党から市議員に就任した。京都市会では同年6月末までに中立議員主体の民友会（10名）、中立議員と民政党議員の市正会（8名）、民政党議員主体の民政倶楽部（22名）、中立議員主体の準無所属（5名）、中立議員と政友会議員の無所属（8名）、無産政党議員の無産議員団（5名）と、各会派が成立した。選挙で大勝した民政党議員主体の民政倶楽部が当時の土岐嘉平市長を支え、無産議員団以外の他の会派が入れ替わり連立する体制がとられた（『市会史』145-147、199頁）。無産議員団は友愛会京都支部に早くから参加し、1910年代から多くの労働争議を指導してきた、すでに府会議員でもある奥村甚之助（労農同盟）、それに続く長い闘争歴の半谷玉三（労農大衆党）、奥村や半谷と同じ労働運動家で府会議員の神田兵三（労農大衆党）、水平社中央委員の菱野貞次（労農大衆党）と蟻善という構成であった⁽⁴³⁾。蟻善以外は労働者の出身で労働運動・無産運動の闘士であった。

では、蟻善の市議員になった後の活動をみてみよう。最初に、市会での活動である。蟻善は京都市会に1929年6月6日から1931年7月1日までの28回の会期中、26回に出席している。発言をしたのは8回であるが、3回は単に無産政党議員の発言に賛意を示しているのみで、実質の発言は5回である⁽⁴⁴⁾。市会での主な活動が次頁表3である。まず、既成政党の戸別訪問や買収などに苦勞した蟻善ならではの既成政党の選挙違反に関する質問をしている。次に無産政党議員として、市設水泳場の無産階級の子供への利用機会を増やすために、利用料金を無料にすることや水泳場の貸与を禁止するなどを提案している。また、薬剤師らしく、保健委員に就任し、実費診療所や無料産

(41) 『上田』4-3「スクラップ帳」9559-081。

(42) 京都市会事務局調査課編『京都市会史』1959年、「資料編Ⅲ市議員選挙結果調」66-72頁（以下、『市会史』）。

(43) 京都府議会事務局『京都府歴代議員録』152-154、336-338頁（以下、『議員録』と略記する）。『京都姓氏人物大辞典』角川書店、212、261、552頁、『京都日出新聞』1929年5月23日、白木正俊「菱野貞次と京都市政（上）」（公財）世界人権問題研究センター『研究紀要』12号、2007年3月）。

(44) 『京都市会会議録』（昭和4年下半期 - 昭和6年上半期）。

表3 上田蟻善の京都市会における主な活動

市会年月日	案件	発言内容と返答など
1929年 6月6日	選挙の効力に関する異議申立	市会議員選挙における不正投票や選挙違反の実際を、蟻善自身の聞き取り調査にもとづいて指摘した。しかも、その選挙の効力に対する異議申立自体が確かか、市側の確認もどうか怪しい事も指摘した。岡田喜久治市助役は実際に調べてみないと明確な返答はできない。調査後に返答したいと返答した。
1929年 6月29日	京都市設水泳場使用料条例制定について	蟻善は従来は鴨川疏水の一部で遊泳していたが、衛生上、安全上の理由で思い切り遊べない。勤労無産階級の子供の経済的負担軽減のために市設水泳場は無料にするべきと訴えた。岡田喜久治市助役は①無料にしたいのは山々であるが、プールは水の取り替えが少なく、衛生的でないとの批判を受けることがあった。そのため、多少料金をとって、十分な衛生設備にしたい。②無料にすると多数の人々が押し寄せ、衛生管理が不可能になってしまう。料金をとって、衛生管理をきちんとするために料金をとることが必要である。③貧困児童がいたならば、小学校の校長の証明があれば、免除できるような規定をつくったと返答した。蟻善はこれらの意見に返答し、①多数の勤労無産市民の施設である水泳場を特定の日に貸与することを原則として禁止するべきである。②全市民が多数貧困に陥っている。もしかしたらではなく、貧困な人間が京都にたくさんいるということを考えてもらいたいと訴えたが賛成少数で否決。
1929年 10月30日	常設委員決定	保健委員に就任。
1930年 2月25日	昭和五年度予算案	①特別税・営業税・雑種税について、免税額を国税の免税額以上に引き上げてほしい。現在土地所有者及純益年額400円未満は国税を払っていないが、地方税は賦課されている現状を批判した。また数千円以上の利益を得ているものは、もっと高率の累進課税を賦課してほしい。②寄生虫検査費及結核予防費の計上と消毒所費、汚物掃除費、尿尿汲取費、撒水費の大幅な増額を評価し、市立無料健康相談所や無料または実費診療所、無料産院の建設の意志を聞きたい。③京都市職員や小学校教員、保育士などの勤務時間・慰労金・退職金の待遇改善。また、正職員とその他の職員の待遇差別撤廃を訴えた。土岐嘉平市長は①富裕層からたくさん地方税をとりたい考えはあるが、国税は法律でそれぞれ税率が定まっており、地方税はそれを超えて税率をあげたり、免除することができない。やむをえず、貧困者からも地方税を徴収している。ご主旨は同感である。②市役所内の衛生課で健康相談を受けている。経費が許す限り、将来そういう事業をやっていききたい。京都病院も伝染病患者ばかりになっているが、普通の病気も治療できるような体制をつくっていききたい。③職員の薄給者に対する処遇については、当局もつねに考えていると返答した。
1930年 5月19日	国勢調査及労働統計実地調査諸費予算内訳書について	蟻善は国勢調査及労働統計実地調査諸費予算内訳書の総額が5,992円の中で、記念品費が1,800円である。これは総額の30%強にあたる。さらに関係者の慰労金を加えると2,600円になり、予算の半分近い金額になる。これは不穏当でないかと訴えた。市総務部文書課長川崎栄喜田は人手が必要な調査で、3年に1回行われている。該当の労働者は約2万人おり、労働者や事業者も含む非常に複雑な調査である。こちらの調査担当人員も360人を予定している。これらの調査にあたる工場主、職員、労働者の調査員はこの調査のために約10日間はつぶれる。しかし、これらの人々に報いるための手段がないので、記念品費をあげている。これらの調査に当たる市の人員も30人、府の人員も50人は必要である。事務的に間違いなく、調査する費用と云うことでご了承いただきたいと返答した。
1930年 12月16日	菱野、神田、半谷3議員に対する警告をし、反省を促す決議案	市会議員日暮正路が提起した決議案に市役所赤旗事件に対する警告、反省を促す決議案に対し、蟻善は市会議員の中にも選挙法違反に問はれて、上告中の者がおり、汚職事件で罪にとわれて、上告中の者もいる。無謀の挙だが、やむにやまれぬ事情のために非合法の手段に訴えた無産党議員のみで警告や反省を促そうとする決議には反対であると訴えたが、賛成少数で可決された。
1930年 12月16日	京都駅及東海道線高架要望に関する意見書案	17名の意見書案提出議員に名を連ね、11名の陳情委員に就任する。無産党政議員は蟻善のみ。
1931年 7月30日	生祥学区学区会議員解任	同年7月13日死去による解任。

出典：『京都市会会議録』昭和4-6年度、『朝京』30・12・17、『日出』30・12・17。

院の設置を求めたり、地方税の免税額を国税以上に引きあげることや市役所の正職員とその他の非正規職員との待遇の均等化などを質問している。さらに国勢調査、労働統計実地調査費中の記念品費の突出ぶりを批判したり、無産政党議員らしい活動を行っている。注目したいのは「京都駅及東海道線高架要望に関する意見書案」の提出議員17名になったことである。無産議員団は蟻善のみが参加していた。11名の陳情議員にも就任し、党派の枠を超えて既成政党の議員とも連携していた。

次に社会的活動をみてみよう。まず関西毎日新聞社争議に関与した。同社は八木重太郎が1927年9月府議選に落選したのを契機に、新聞発行を思い立ち、従業員10名(内女性1名)で細々と営業してきた。1929年5月の市会議員選挙で、八木は当選したが、当選すれば新聞発行の目的を達し、経営状態もわるいため、廃刊ないしは大整理を行うことを決心し、同年6月24日従業員に対し、月給1割値下並びに1名の解雇を宣告した。従業員は結束して、第1に従業員の解雇反対、第2に2月分残業支払全額支給、第3に減給反対などの要求書を提出し、ストライキにはいった(『社通』58号、29・7・8、51頁)。会社側の依頼により、蟻善が調停し、解決した(『社通』60号、29・7・21、53頁)。次に東亜キネマ争議に関与した。1929年8月31日付で、東亜キネマは撮影所従業員を19名解雇した(『社通』68号、29・9・16、47頁)。その後同年9月17日に会社代表と蟻善を含む社民党京都支部、争議団の代表が折衝の結果、解決した(『社通』70号、29・9・30、59頁)。以上のように労働争議の調停に尽力していた。1930年6月19日夜に三条青年会館で蟻善を含む社民党京都府連主催で演説会を開催し、失業救済事業を要求する要求を行った。翌20日には府知事や市助役に会見し、要求し、予算の範囲で失業救済事業を起こす言質を得た(『社民』20号、30・7・10)。また、家族ごとに1カ月10銭の組合費で往診と薬代併せて1日分10銭ですむという民衆保険組合設立事務所が置かれ、同年9月1日に東山馬町に診療所を開設するという事業を立ち上げた。これは箕和田医学博士を顧問として、蟻善が主事、医師の津司市太郎などが委員となって実現の準備をすすめ、付属事業として助産もやると報じられた(『社通』263号、30・8・22)。しかし、診療所の建設がその後どうなったかはわからない。

さらに社民党は学区会議員選で進出した。学区会議員は学区ごとの諮問機関だが、選挙における末端単位であり、重視されていた。1929年12月9日の社民党第4回全国大会で支部長吉川末次郎は「区議は他無産各三名宛に対し、我党は十三名を有し」と増加していた(『社通』81号、29・12・16、55頁)。また、市議選以降と思われるが、1930年4月には蟻善も市会議員とともに生祥学区学区会議員にも就任していたことが確認できる⁽⁴⁵⁾。1930年9月11日に上京区学区会議員選挙が行われ、無産政党候補のいなかった3学区に立候補者が1名ずつ、合計3人当選した。無産政党の候補は19名出馬し、8名当選した(『社民』23号、30・10・15、『朝京』30・9・13)。

また、同年10月12日には失業救済事業による京都市西紫野土地区画整理組合の在日朝鮮人労働者に関する賃金未払い請求闘争にも関与した。在日朝鮮人労働者の代表約10名が京都労働総同盟書記長と蟻善、神田兵三、菱野貞次の無産政党市議にともなわれ、市土木局長を訪ね未払い賃金1万円の支払を組合監督者の京都市に陳情した(前掲、拙著161頁)。

(45) 『名誉職大観』218頁、『昭和六年京都市会会議録下篇』417-418頁。

同年11月9日夜に京都支部連合会の第5回大会が開催され、京都市内、府内郡部各地に8支部12分会を組織し、1,824名の党員と6,410名の団体員の支持を得ていた。蟻善も会計監督に就任した（『社民』24号、30・11・15）。

同年11月27日には、菱野貞次・半谷玉三・神田兵三の労農大衆党所属市会議員3人が失業救済事業に従事していた労働者数百名とともに京都市役所に乱入し、2階のバルコニーで赤旗をなびかせて、市の失業救済事業の不備を訴えて、要求を記した決議文を村田市助役に渡すという行動にでた。この市役所占拠事件は市会で大問題とされた（『運動史』812-814頁）。同年12月16日に下京区選出市会議員中立会派の日暮正路（土木建築請負業）（『日出』29・5・15）はこの事件に対し、市会議員ともあろうものが、失業登録労働者を率いて、市役所を占拠し、実行行使に出たことを非難し、市会に「菱野、神田、半谷三議員ニ対シ、警告ヲ為シ、反省ヲ促スノ決議案」を提出した。蟻善は反論して、市会議員の中にも選挙法違反に問われて、上告中の者がおり、汚職事件で罪に問われ、上告中の者もいる。やむにやまれぬ事情のために非合法の手段に訴えた無産党議員のみに警告や反省を促そうとする決議には反対であると訴えた。ここで、重要なのは衆議院議員も兼任し、京都お伽噺倶楽部を設立し、映画や演劇にも造詣の深かった鈴木吉之助（政友会）（『議員録』317-319頁）の意見である。鈴木は蟻善と市役所赤旗事件について個人的に話したときに「上田君ハ合理的ナ譯ノ分ツタ如何ニモ平静ノ上田君ラシイ話ヲシテ居ラレタ（中略）私モアノ行動ハイカヌト思フ市会議員ノ職ニ在リナガラ集团的ニ扇動的ニアンナ者ヲ引張ツテ来ルノハイカヌ、私ハアノ行動ニハ反対ダ、ダカラアノ行為ニハ入ラナカツタト云フコトガーツ、ソレカラーツは何デモ相談スルケレドモアア云フ宣伝的な事柄ニナルト三人ダケヤツテ私ヲ振ルラシイ」と打明話をされ、反対論をした蟻善は無産政党の僚友であろうと自分の信念に基づいて、決議に賛成するべきではないか。それが蟻善の真意ではないかと問いただした⁽⁴⁶⁾。蟻善はこの呼びかけに沈黙した。蟻善は自分が正しいと思う行動ならば、積極的に行ってきた。だが、無産政党議員団でも蟻善と労働者出身の3名とは意見や政治行動のスタイルが相当違っていたのである。

5 無産政党合同運動と蟻善の死

(1) 京都における無産政党合同運動

同時並行で、無産政党合同運動が進んでいた。1930年2月11日に社民党三党実現同盟が結成され、全国大衆党とともに合同促進に努めていた。京都を含む16府県に同盟参加者は広がり、参加者数は約2,000名だった（『昭和六年中ニ於ケル社會運動ノ状況』569-570頁）。

京都でも同年2月20日の総選挙で無産政党各派は惨敗し、京都1区の暗殺された山本宣治の後継候補の河上肇（労農党）7,225票、水谷長三郎（労農大衆党）5,024票、吉川末次郎（社民党）2,632票、京都2区の細迫兼光（労農党）8,647票と、無産政党の候補は全員落選した。この惨敗ぶりに、世論は無産政党内部の対立・抗争による共倒れとして、厳しく批判した（『運動史』662-672頁）。惨敗を受けて、同年3月5日、労農大衆党、日本大衆党、社民党、全国民衆党の各京都

(46) 『昭和五年京都市会会議録下篇』263-268頁。

支部代表者など約 50 名が集まり、無産政党合同促進京都地方協議会を組織し、全無産政党の無条件合同の促進を決議した（『社通』129号, 30・3・9, 1頁）。

蟻善も四条富小路在住の医師津司市太郎⁽⁴⁷⁾とともに無産政党の全国的合同を主張していた。同年 8 月 1 日に京都府連合会長の吉川末次郎が東京市社会局嘱託として就任し、津司市太郎が連合会長代理となった（『昭和六年中ニ於ケル社会運動ノ状況』571-572 頁）。その後、社民党京都府連合会拡大執行委員会が開催され、社民党、全国大衆党京都地方合同促進協議会に蟻善も含む 15 名を委員として協議会に参加させる事が決定した（『社通』311号, 30・10・19）。さらに、同年 11 月 20 日には、社民党と全国大衆党は 15 名ずつ委員を出し、「無産政党合同促進京都地方協議会」を組織して、事務所を蟻善方に置き、労働農民党京都支部連合会にも参加を呼びかけていた（『社通』341号, 30・11・25）。同年 11 月 24 日には、社民党京都府連合会拡大執行委員会に蟻善も出席し、社民党、全国大衆党両党合同促進協議会に労働農民党を参加させ、三党合同促進協議会で、生活防衛闘争などを行う事を決議した（『社通』344号, 30・11・28）。

社民党京都府連合会は同年 12 月 9 日の社民党第 5 回大会 3 日目で、京都案として提出した「無産政党合同促進に関する件」を津司市太郎が説明した。蟻善も中央委員として参加していた。団結の必要から三党即時合同を京都府連合会では決議し、合同促進協議会を全無産政党に提唱したいとした。この大会では石川第二支部、唐津支部、長野支部が同様の無産政党即時合同案を提出していた。大衆党との合同共同委員会設置案（本部案）、三無産政党合同即時促進案（京都案）の二意見の意見通告を求めたが、本部案賛成 16 名、京都案賛成 7 名があった。京都案賛成演説は、群馬県連 1 名、長野県連 2 名、新潟県連 3 名、東京八南支部 1 名があったが、本部案可決、賛成者約 400 名、京都案は否決され、賛成者は 23 名であった（『社民』25号, 31・1・10, 『社通』356-359号, 30・12・12-16）。

しかし、同年 12 月 26 日の第 3 回無産政党合同促進京都地方協議会では、労働党の協議会参加を承認し、1931 年 1 月 20 日の京都府会議員補欠選挙で労働党員坂本時三を共同候補として決定するなど、社民党大会の決議を無視した。ここで、非合同派の吉川末次郎などは同年 1 月 12 日の社民党府連執行委員会で合同促進同盟からの即時脱退、坂本時三の合同候補を承認しない、津司市太郎と蟻善を除名すると決議した。合同派は途中で委員会を退場して、執行委員会の決定は認めない、合同協議会を支持する、坂本時三府議候補を応援すると申し合わせた。翌 1 月 13 日に「社民党京都府支部連合会三党合同実現同盟」（以下「実現同盟」）を組織して、社民党の名の下に合同促進を行うこと、除名処分に服しない事を決議して、府連と対抗し、分裂した。社民党京都府連は約 200 名の党員と有力幹部を失ったという（『社通』376号, 31・1・16, 同 378-379号, 31・1・18-20 日, 『昭和六年中ニ於ケル社会運動ノ状況』572 頁）。

同年 1 月 14 日、「実現同盟」は、勢力は左京、下京の全部、右京、上京の大部分、東山の一部、総同盟系組合も運輸労働、金属・労働、印刷の両組合、金属・労働第 2 支部、紡績繊維第 2 支部、全体の執行委員 29 名のうち 15 名が合同派であり、全体の 9 割の党員が「実現同盟」であると主張

(47) 津司市太郎は 1894 年 5 月 21 日生、立命館大学予科を中退し、京都府立医学専門学校を 1919 年に卒業、1920 年に府立八坂病院に勤務した。1922 年に開業している。1927 年ごろから社会運動を始め、社民党中央委員、京都支部書記長だった（『議員録』349-350 頁）。

した。同じ14日に京都地方三党懇親会を開催した。蟻善も「実現同盟」を代表して参加し、三党ともに東山区府議補選終了後に即時合同することに合意した。16日には大山郁夫、堺利彦、水谷長三郎、津司市太郎、蟻善ほかが弁士として、岡崎公会堂で3党合同促進、第59議会闘争大演説会を開催した（『社通』378号、31・1・18）。

（2）全国労農大衆党の設立と蟻善の死

社民党京都府連合会に続いて、同年1月16日に社民党中央執行委員会も津司市太郎と蟻善を除名した。理由は2人が同年1月7日に京都地方合同促進協議会の名で、社民党の全国各地の連合会に三党即時合同の檄文を送ることを決定したこと、吉川末次郎連合会長はこの決議について津司と蟻善に難詰したため、大衆党員から暴行を加えられたこと、また、同月12日に島中雄三を派遣したが、「三党実現同盟」を結成し、運動を続けたためとした。津司、蟻善を含む13名が除名され、社民党京都府連合会「三党実現同盟」の解散を命じた⁽⁴⁸⁾。さらに社民党京都府連は党の議員行動規定に従い、蟻善に市会議員の辞職を勧告し、市会議員辞職届を市長に提出すると決定した。蟻善は当然党規に違反する行動はとっていないと辞職しなかった（『社通』383号、31・1・24）。

同年1月16日には、大山郁夫労農党首を迎えて、岡崎公会堂で大演説会を開いた。その日の夜に聴衆は殺到し、約2,500人と満員であった。京都の全無産政党的な主要な人々が熱弁を振るう中、蟻善は「例によって巧みに諧謔を交えて、三党合同の経過を報告すると共に全市民の絶対支持を切望して満場の喝采を浴び」た（『日出』31・1・17）。

同年1月25日に京都地方三党促進協議会は第5回委員会を開催し、社民党本部派を除き、京都地方無産政党中央同盟を設立することを決定した（『社通』388号、31・1・30）。さらに、同年2月11日に全国的な三党即時合同派を集め、「社会民衆党三党実現同盟」を結成した（『昭和六年中ニ於ケル社会運動ノ状況』610頁）。そして、同年2月15日には、全国に先駆けて「無産政党中央同盟」（以下「合同同盟」）が創立したのである。代議員約200名が集まり、蟻善は進行係をつとめ、財政事業部長に就任した（『社通』403号、31・2・18、『日出』31・2・15夕、『昭和六年中ニ於ケル社会運動ノ状況』610頁）。その後、「合同同盟」は丹波、丹後地域の京都電灯に対する電気料金値下要求運動に応えて、同年2月19日亀岡市公会堂、20日園部町劇場、21日福知山公会堂、22日綾部市公会堂で水谷長三郎や蟻善、神田兵三府市会議員、半谷玉三京都市会議員、津司市太郎なども乗り込み、電気料金値下を訴えた（『社通』406号、31・2・21）。「合同同盟」は同年3月1日に反動議会暴露演説会を行い、蟻善も壇上に立った（『朝京』31・3・2）。その後、「社会民衆党三党実現同盟」は同年4月13日に全国大衆党、労働農民党と無産党合同協議会を設立した（『社通』451号、31・4・17）。そして、同年7月5日について労働党、大衆党、社民党合同実現連盟が合同し、全国労農大衆党が設立された（『社通』519号、31・7・7）⁽⁴⁹⁾。

蟻善は同年4月29日に東京で中耳炎にかかり、帰京後入院していたが、同年7月13日に死去した（『日出』31・7・14、『朝京』31・7・14、『日日』31・7・14）。蟻善の葬儀は全国労農大衆党

(48) 『社通』387号、31・1・29、同391号、31・2・3。『社民』号外、本号外は1931年3月3日の中央執行委員会指令が掲載され、1931年3月上旬以降に発刊されたと思われる。

(49) 全国労農大衆党の結党過程の詳細については、本誌掲載の「全国労農大衆党結党の検討」（福家崇洋）参照。

葬として、同月16日に午後8時半から三条青年会館で開かれた。定刻前にすでに参列者約500名が会場に溢れ、「その党葬を華々しくした。(中略)十一時過ぎ式を閉じたが頗る盛儀であつた」(『朝京』31・7・17)。蟻善は、京都において実質的な全国で最初の無産政党合同に大きな貢献をし、この世を去った。享年40歳であった。

おわりに

本論の要旨をまとめる。蟻善は老舗の口入屋上田屋に生まれ、京都薬専を卒業し、京都帝大病院薬局を経て、市内中心部の三条富小路にウエダヤ薬局を開業した。実費診療や施薬も行っていた。彼は様々な初期社会主義の雑誌を講読、投稿し、みずからも『へいみん』を刊行し、各地の社会主義者と交流した。そして、甲種要視察人となり、特高の監視対象となった。彼はクロボトキンや臨濟宗の公案集などを読み、「ホントのオレ」を模索し、苦悩や葛藤を抱えていた。特高の監視は厳しいもので、店や家屋の監視、訪問、スパイの派遣が日常だった。その後は、目立った活動はしていなかったが、大杉栄の訪問や米騒動時には特高の監視や取り調べをうけていた。また、山鹿泰治などアナーキストとともに検挙され、4カ月収監された。1921年2月ごろまでは特高のスパイの訪問があり、監視対象になっていた。アナーキスト仲間とはその後もつきあっていた。

蟻善の薬屋としての商売は順調で、1923年には薬剤師京都代表者の1人だった。多くの仲間と研究サークルである京都本草会を立ち上げていた。支持基盤の1つとして薬剤師会のつながりは重要であった。蟻善は大蔵流狂言師でもあり、多くの人々との交流があった。狂言の腕や能楽の素養は素人レベルを超えており、京都の能楽界にも貢献していた。だが、蟻善はそんな自分をシニカルに眺めており、能楽というブルジョアな趣味にひたりながらもプロレタリアの解放を叫ぶ「じれんま」を抱えていた。そして、大衆演劇の役者である曾我廼家五郎・志賀廼家淡海・沢田正二郎とは親友であった。さらに南座観劇会の活動にも関与していた。しかし、蟻善は「じれんま」とともに裕福で享乐的な生活に満足できず「にがき顔」を抱えていたが、狂言、演劇などを通じた多彩な交友関係も支持基盤につながっていった。

アナーキスト蟻善は1927年になると、社民党京都支部結成に参加する。蟻善は京都府議員選挙に立候補した。薬業界と社民党員の支持をえて、当選が確実視されていたが、次点で落選した。京都の社民党は普選第1回の総選挙でも大敗し、左派の労農党に比べ、勢力は著しく劣っていた。総同盟京都支部の再建が図られていたが、うまくいかなかった。蟻善も増区問題への対応に見るように党利党略よりは自分の考えに忠実に行動していた。京都の社民党は創業者たちの小市民的性格が強く、広範な労働者の支持を得ていなかった。京都市議員選挙では中京区選挙区内の大衆全ての支持を得ようと積極的な選挙戦を行った。薬業界、職業紹介所組合、スター食堂グループなどの支援を受け、既成政党の個別訪問や買収の不正を訴えていた。その結果、社民党候補者で唯一の当選を果たし、無産政党候補者の最高得票だった。市議員選挙で無産政党議員は5名当選した。蟻善以外の全員が労働者の出身で労働運動・無産運動の闘士であった。蟻善は市会活動では、無産政党議員団の一員として活動しつつも既成政党の意見書提出にも協力していた。また、労働争議の調停、社民党設立の診療所の設立などに関与した。学区議員選挙に社民党は多く進出し、地

盤固めもできていた。しかし、蟻善は市役所赤旗事件への対応で、無産政党議員への警告、反省決議案に反対したが、政友会議員から市役所赤旗事件のような対応には反対であったと暴露された。蟻善は自分が正しいと思う政治行動ならば、社民党京都支部が反対しようと、既成政党議員の意見書案だろうと積極的に行ってきた。無産政党議員団でも蟻善と他の労働者出身の議員とは意見や政治行動のスタイルが相当違っていた。

しかし、同時並行で無産政党合同運動が進んでいた。京都でも普選第2回総選挙で無産政党候補は惨敗した。世論は無産政党内部の対立・抗争による共倒れを、激しく非難した。蟻善も津司市太郎とともに京都の無産政党合同運動を推進した。しかし、無産三党即時合同論者の蟻善は、大衆党との合同共同委員会設置を推進する社民党本部から、津司とともに除名されてしまう。蟻善は「実現同盟」を組織して、社民党府連と対抗した。「実現同盟」は大衆党と労農党と「合同同盟」を組織し、京都で実質的な三党合同を成し遂げたのである。

以上、蟻善はアナーキストから出発し、無産政党右派である社民党に所属したユニークな人物である。しかし、彼の生涯をみると、彼なりの苦悩や葛藤を抱えながらも裕福で享乐的な生活を送っていた。京都薬業界の世話役の1人であり、狂言や大衆演劇によるネットワークなど名望家に近い存在形態だった。それは彼が実業同志会にも所属したことや後に生祥学区学区会議員も兼任していることで理解できる。京都は労働総同盟の勢力が弱く、選挙戦も薬業界と職業紹介所組合の推薦、実家のある日彰学区と店のある生祥学区の地縁血縁を動員するなど名望家的な支持基盤を固めつつ、大衆には社民党に依拠した無産政党人気で得票し、当選を果たした。また、社会運動や無産政党の統一戦線の確立にも尽力したが、既成政党ともパイプを持つパイプリーマン的な人物でもあった。選挙や政治行動も社民党中央や総同盟とのしがらみがなかった。そのため、もともとの思想の柔軟さもあるが、自由な政治行動がとれ、京都における無産政党合同に大きな貢献が可能になったといえよう。

本稿は普選期における社民党京都市議員上田蟻善の支持基盤形成を思想とネットワークを組み込みながら、再構成した。普選期における既成政党候補者の支持基盤研究に比べて、ほとんど進展していない無産政党候補者の支持基盤と、無産政治勢力やその周辺の人々の研究が進むことで、普選期地域政治の新たな実像が姿を現すだろう。

（すぎもと・ひろゆき 大阪大学大学院文学研究科非常勤講師）

【付記】

本稿は科学研究費補助金（基盤研究C）「戦後失業対策事業・失対労働者関係史料の整理・公開に関する研究」と同（基盤研究B）「戦前社会事業の到達点と現在への視座——福祉国家の源流をたどる」の研究成果の一部である。